

# 蘖（ひこばえ）

主幹教諭 中村昌子

10月も後半となり、秋の深まりを感じる毎日です。もう少しすると、木々の紅葉も本格的に始まります。学校の中で紅葉する木々といえば、正門入り口のイチョウや、グリーンベルトの桜がその代表といえるでしょう。しかし、今年は少し残念な紅葉の季節となりそうです。運動会にいらしたときに気づいた方もいらっしゃると思いますが、校庭の桜の木がこの夏休みの間に3本ほど伐採されました。グリーンベルトの2本と体育館の脇にあった1本です。春には美しい桜の花が新1年生を迎え、子供たちも学級によってはお弁当デーにお花見弁当を楽しんでいるところもありました。校庭の見晴らしがすっきりしたような印象がありますが、春を迎える頃には何ともいえない寂しさが漂う予感がしています。

どうして、伐採となってしまったのかというと、大学から樹木の調査が入ったからです。最近、台風などで思わぬところで古木が倒壊する事故があります。また、桜、とりわけ学校に植えられているソメイヨイノは木の寿命がおよそ60年ともいわれ、戦後の復興期に大量のソメイヨシノが植樹された日本全体でも、一気に桜が見られなくなるのでは、という話さえ聞こえています。本校の樹木も専門家による調査の結果、見た目には美しい花を咲かせている木でも、かなりの傷みが進み、倒木の恐れがあるので伐採をするという診断が下ったのです。とてもショックなことでしたが、倒木する危険性を考えたらそれに従う他ありません。

そして、伐採された後には大きな切り株が残りました。ところがどうでしょう。その切り株のあちらこちらから、新しい新芽が出ているのです。これは「蘖（ひこばえ）」と呼ばれ、太い幹に対して「孫（ひこ）」に見立てて「ひこばえ（孫生え）」とよばれたところに語源があるとされています。森林伐採のあと、切り株からの蘖によって、新たな森林ができるようにすることを「萌芽更新」といい、かつて日本の里山はこのことによって維持されたといわれています。実は数年前に台風で倒壊してしまった体育館の前の月桂樹の朽ちた切り株の横には、既に直径5、6cmに成長した蘖が何本か伸びています。根が生きていれば、その命を確実に次につないでいこうとする植物の生命力。命をつなぐことの意味をわたしたちに教えてくれています。



間もなくきくまつりですが、菊も冬至芽といって、地上の部分が枯れてしまっても、その部分を切って根を大切にしておけば、冬の間新しい芽が生えてきます。そのたくまさが「菊の子」の由来でもあります。子どもたちが育てている菊もきくまつりの後、菊を鉢から地に戻し、そこから出た冬至芽が成長したのから、次の年の春、挿し芽をとっているのです。

「蘖」と「冬至芽」、その成り立ちには似ているものがあります。今年のきくまつりには、子どもたちの思いの詰まったどんな花が咲くのでしょうか。その思いと菊の命は来年の菊作りへとつながっていきます。そして、校庭の桜の「蘖」は、花は咲かなくとも、来年の春、子どもたちの挿し芽の様子を見守ってくれることでしょう。